

〈共同討議 I / 「カテゴリーの超越論的演繹（第二版）」を読み直す〉

B版演繹における判断と直観

村井 忠康

1. はじめに

カテゴリーの超越論的演繹においてカントは感性と悟性の協働について論じている。この協働の二元論的解釈によれば、悟性の働きとは独立に感性的直観が与えられることになる。伝統的とも言えるこの解釈は、感性と悟性の厳格な区別を拒否しているように見える B 版演繹¹の解釈を通じて、幾度となく挑戦を受けてきた。本稿もまた、この挑戦の系譜に連なる試みである。

以下ではまず、超越論的演繹に先立つ形而上学的演繹のうちに、判断と直観の結びつきの捉え方として B 版演繹の解釈が参照すべきものが示されていることを指摘する(2節)。次に、B 版演繹が、二元論的解釈ではカント自身が認めているとされる、「悟性の機能なしに現象が直観において与えられうる」(A90/B122)という可能性を拒否するために組み立てられていることを確認する(3節)。最後に、B 版演繹の反二元論的解釈の細部を埋める場合、中野(2021)が行為論的な知覚論として提示するカントの自己触発論とは別の方策を取らなければならないと論じる(4, 5節)。

2. 判断の統一性と直観の統一性

形而上学的演繹には B 版演繹の萌芽形態と見なせる箇所がある。この箇所の前半と後半をそれぞれ $[a][\beta]$ と呼ぶことにしよう。カントはまず $[a]$ において判断と直観を対比しつつも、両者のあいだに内的連関があることを明らかにしている。

$[a]$ 一つの判断におけるさまざまな表象に統一を与えるのと同じ機能が、一つの直観におけるさまざまな表象のたんなる総合にも統一を与える。この機能は、一般的に表現すれば純粹悟性概念と呼ばれる(A79/B105)。

諸概念の結合である判断の統一も、感性的多様の総合である直観の統一も、それらを可能にす

1 この特徴づけは、Pippin (1989) のように、感性論でカントが実際におこなっていた「厳格な区別」を B 版演繹において撤回していると読むか (p. 30)、McDowell (2009a) のように、そもそも撤回されるべき厳格な区別などなされていなかったと読むか (p. 70, n. 4) については、中立的である。ここで必要なのは、B 版演繹には、伝統的解釈が支持する厳格な区別が消失するように見える箇所が少なくないということだけである。

るのは純粹悟性概念である。しかし「同じ機能」が「一般的に」ではなく判断に即して表現されるなら、それは判断の論理形式と呼ばれる。機能と形式の区別²に留意して、より正確に言い直すなら、判断の論理的機能の実現様式の一つが純粹悟性概念の一形態としての判断の論理形式である。

カントは、この形式をカテゴリーという存在論的概念の名に値するものだと考えている(A79-80/B105)。そのかぎりではそれは、内容を欠くたんなる形式ではなく、それ自体の内容をもつ形式でもある。では、その内容性はどのようにして確保されるのか。[β]において、これは明らかにされる。

[β]したがって同じ悟性が、しかも分析的統一を介して、概念のうちに判断の論理形式を生み出したのとまさに同一の働きによってまた、直観一般における多様の総合的統一を介して自身の表象のうちに超越論的内容をもたらす(A79/B105)。

悟性「自身の表象」とは判断の論理形式のことであり、この形式が超越論的内容をもつ、すなわち、「対象(Objekt)とアプリアリに関わる」(A79/B105)のは、判断の形式として実現しうる機能が「直観一般における多様」を総合統一する仕方としても実現しうるからである。

だが、ここでいう「直観一般における多様」は直観において与えられる個別的な経験的多様ではありえない。もしそうだとしたら、判断の形式自体がもつ内容を超越論的と呼ぶことはできないだろう。判断の形式として実現しうる論理的機能が直観において実現する場合、この機能は、個々の直観の経験的多様ではなく、そうした多様の一般的構造であるべき非経験的な多様を総合統一する形式として実現しなければならない。感性論の言葉で言えば、この非経験的な多様は「純粹直観の多様」である。言い換えれば、感性和悟性の協働の基本的な側面は、それ自体が直観(の対象)として考察できるような直観形式への、悟性の論理的機能の寄与として取り出すことができる。

[β]の解釈において私は、悟性の「同じ働き」を総称的な類として理解している。この類は、判断の形式として実現するような働きと直観の形式として実現するような働きという二つの種をもつ。これは、[α]の解釈についても言える。判断の統一性と直観の統一性は、総称的な類である統一性の二つの種である。この類的な統一性は、超越論的演繹では「統覚の根源的総合的統一性」として主題化される。A 版演繹では判断への言及がないため、超越論的演繹が形而上学的演繹からの引用箇所十全な展開を狙ったものであることが見えにくい。B 版演繹においてカントは、統覚の総合的統一性を「この能力」と呼んだうえで、それを「悟性そのもの」であるとしている(B134Anm.)。A 版演繹にこうした特徴づけがないわけではない³。しかし、判断の統一形式と直観の統一形式が「能力」としての、あるいは、よりその含意を引き出して言い換えれば、「潜在性」としての統覚の統一性の二つの実現様式であるということは、判断が主題的に論じられる B 版演繹でなければ明確に見てとれないだろう⁴。

2 Wolf (1995), S. 19-20.

3 「想像力の総合に係る統覚の統一性は悟性である」(A119)。この一文でカントは、統覚の統一性を悟性という能力と同一視している。

4 B版演繹§19の表題は、「すべての判断の論理形式は判断に含まれる諸概念に対する統覚の客観的統一に

3. B版演繹の構成の狙い

もっとも抽象的なレベルで超越論的演繹の目標を述べるなら、統覚の根源的総合的統一性が現象世界の統一性でもあることを示すということである。統覚の統一性の実現様式の一つである判断形式は実体概念や因果性概念のようなカテゴリーとして、現象世界の一般的構造を捉えるものでなければならない。しかし、カテゴリーが悟性に起源をもつ純粹概念でありながらも、現象世界の構造を捉えることはいかにして可能なのか。言い換えれば、カテゴリーがたんなる判断形式という主観的条件にとどまらず、現象世界という存在の側の形式、すなわち客観的条件でもあることは、いかにして可能なのか。カテゴリーの客観的妥当性の証明という課題でカントの念頭にあるのは、このような問いである。

この問いは容易には克服しがたい困難を突きつける。カントは、感性の条件と悟性の条件を対比しつつ、その事情を次のように説明している。

(…)感性的直観の対象が心のうちにアприオリに存している感性の形式的条件に従っていなければならないということは、明らかである。なぜなら、そうでなければ、感性的直観の対象はわれわれにとっての対象ではないだろうからである。しかし、感性的直観の対象がさらに、悟性が思考の総合的統一のために必要とする条件にも従ってなければならないという結論については、それほど容易には理解できない。なぜなら、おそらく現象はいずれにせよ、悟性の統一の条件にまったく従っていないと悟性がみなすような、すべてが混乱しているあり方をしていることも可能かもしれないからである。(A90/B122-123)

この箇所は、直観への悟性の寄与を認めない二元論的解釈者たちにとっては、カントの自身の立場を述べたものと映るだろう⁵。しかし、前節で形而上学的演繹から引用した箇所を重視する反二元論的解釈者からすれば、別の読み方が可能である。たとえば、マクダウエルは上の箇所においてカントは自身の立場への仮想的反論を述べているものとして理解している(McDowell 2009a, p. 73)。また、コナントは、カテゴリーの超越論的演繹が成功すれば棄却される哲学的フィクションとして、この箇所を理解している(Conant 2016, pp. 100-105)。彼らにとってB版演繹は、思考の条件という判断形式として導入されたカテゴリーが、感性に与えられうる現象に関わらないかもしれない可能性を明確に斥けるように組み立てられている。B版演繹前半部の締めくくりである§21は、後半部が何をすることによってこの可能性を斥けているのかを明示している。

後に(§26)、感性において経験的直観が与えられる仕方から、その統一[この仕方の統一]⁶は、カテゴリーが、先の§20に従えば、与えられた直観一般の多様に指定する統一にほかならな

において成立する」である。ここでの「客観的統一」は、能力ないし潜在性としての「統覚の根源的総合的統一性」の実現のことであると解釈することができる。

5 たとえば、Allais (2015), p. 163を参照。

6 私は以前、「その統一(die Einheit derselben)」を「経験的直観の統一」として読む標準的読解に従っていた

いことが示されるだろう (B144-145)。

「感性において経験的直観が与えられる仕方」とは、われわれのような有限な存在者の場合、空間と時間である。§26においてカントは、空間と時間が「感性的直観の形式としてだけでなく(多様を含む)直観そのものとして(…)アプリアリに表象される」(B160-161)という感性論の論点を引き合いに出す。そして、この箇所への注において、この「直観そのもの」としての空間と時間は統一性をそなえた「形式的直観」と呼ばれている。こうして、形式的直観としての空間と時間は直観(の対象)として、B 版演繹前半部の結論の適用を受けることになる。その結論を述べている §20の表題は、「すべての感性的直観は、そのもとでのみ感性的直観の多様が一つの意識のうちにまとまりうる条件としてのカテゴリーに従う」である。その意味するところは、感性的直観が「(多様を含む)直観」としてそなえる統一性は、統覚の総合的根源的統一性の実現様式の一つであって、この実現の条件はカテゴリーにほかならないということである。B 版演繹前半部のこの成果を踏まえて、カントは §26において、空間と時間の形式的直観は、経験的直観と同じく感性的直観の事例として、統覚の統一性を実現する条件であるカテゴリーによってのみ可能となると論じる。「感性において経験的直観が与えられる仕方」がそれ自体直観(の対象)として考察されることにより、その統一性がカテゴリーに従うものであることがわかるなら、「われわれの感官に現前しうる対象」(B159)の一般的な構造としての空間と時間がカテゴリーに従っていることもまた判明する。これはつまり、「空間ないし時間のうちに規定されて表象されるべきすべてのもの」(B161)としてそうした対象もカテゴリーに従うということである。

しかしここで注意しなければならないのは、悟性の条件として導入されたカテゴリーが直観の形式の構成に関わっているとしても、その関わり方は判断の形式としてではないということである。マクダウェルは彼の初期のカント解釈において、判断の統一性と直観の統一性を同じタイプの統一性とみなすことにより、判断の命題的内容の統一形式(述定形式)を直観内容にそのまま帰属させるという誤りを犯していた。

カントは、経験が客観的志向(objective purport)をもつこと——経験が直観、すなわち、対象を直接主題とする感性的状態として少なくとも呈示されるものから成ること——を、直観がカテゴリー、すなわち純粹悟性概念によって形式を与えられているということによって説明している。(…)カントは、経験が判断に特徴的な論理的統一性を事例化するということによって、経験の客観的志向を説明しているのである⁷。

表象作用としての直観と判断のあり方を区別することにどれほど専念するとしても、この誤りは直観内容を判断の可能的内容へと、つまり命題的内容へと変えてしまう。しかし今や、マクダウェルはこうした直観理解を放棄し、統覚の総合的根源的統一性という総称的な類に対する二つの異なる種の統一性として判断の統一性と直観の統一性を捉えている。

(村井 2013, 80頁)。しかし、ここではマクダウェルとコナントの読解に従っている。この修正は、彼ら以上にテキスト密着型の解釈に取り組んでいるヘップナーのような注釈者もderselbenに関して同じ読み方を行っていることに後押しされた。Hoepfner (2022), p. 83を参照。

7 McDowell (2009a), p. 70.

判断におけるその行使が判断の内容の統一性、すなわち命題的統一性を説明する能力はまた、直観の内容における対応する統一性を説明する⁸。

カントは、直観的統一性と判断的統一性を同じ機能(…)の、相互に対応する(が異なる)所産としている⁹。

判断の統一形式も直観の統一形式もカテゴリーと呼びうるとしても、それは統覚の根源的総合的統一性と同じく総称的な類の意味においてである。形而上学的演繹からの引用[α][β]が示唆していたように、「同じ機能」「同じ働き」であるカテゴリーは判断においては、典型的には、直観の対象を概念のもとに包摂する述定形式として実現し、直観においては、直観の多様を結合して対象の直観を生み出す感性的総合の形式として実現する¹⁰。したがって、カントが超越論的演繹の困難さを説明するときに想定していた「可能性」がB版演繹後半部で棄却されるとしても、感性の条件と悟性の条件の区別が失われ、直観内容が判断的内容とされるわけではない。コナントが言うように、「感性の統一と悟性の統一に総称的に共通するものに関する主張、すなわち、B版演繹後半部が手にする資格を得る必要のある主張は、感性的表象[直観]の統一と概念的表象[判断]の統一においてカントにとって際立つ違いを消し去らねばならないほど過激ではあってならない¹¹」というだけなのである。

4. 「自己触発」の多義性

B版演繹のこうした解釈は、大枠では中野が近著『カントの自己触発論』で展開した解釈と一致すると言ってよいだろう。

たしかに中野は、彼がロバート・ハナに倣って「高度に洗練された概念主義」¹²と呼ぶマクダウエル立場に反対している。というのも、「B版演繹後半部が手にする資格を得る必要のある主張」、すなわち、統覚の根源的総合的統一性は悟性の統一性だけでなく感性の統一性としても実現するという主張をカントは実際には手にできなかったとマクダウエルが解釈しているからである。「統覚の統一の圏外に残したとって私[マクダウエル]がカントを批判しているものは、た

8 McDowell (2009b), p. 260.

9 McDowell (2009c), p. 28.

10 ロングネスはカテゴリーに二つの記述を与えている。「第一の記述のもとで、カテゴリーは[感性的]総合を導く。第二の記述のもとで、対象はカテゴリーのもとに包摂される」(Longuenesse 2005, p. 24)。もしロングネスがこれらの記述を機能としてのカテゴリーに対する二つの記述として考えているのなら、私の解釈は彼女とは異なる。

しかしいづれにせよ、ロングネスの場合、カントにおける「カテゴリー」という用語の適用範囲はマクダウエルよりも広い。直観内容に判断形式を帰属せざることをやめたのちマクダウエルは、直観の統一形式のみをカテゴリーと呼んでいる。しかし、カテゴリーに関しても、総称的類とその種という区別をおこなえば、このような限定は必要ない。

11 Conant (2016), p. 116.

12 中野(2021)、133頁。

だわれわれの形式的直観の質料として理解できると私が主張してきたものだけである」(McDowell 2009a, 81)¹³。中野は、マクダウエルのいう「形式的直観の質料」を感性的所与と言い換えているが(151頁)、これは感覚的多様のことではなく空間時間というわれわれの感性的秩序のことである¹⁴。マクダウエルがB版演繹の成否を判定するために解釈の解像度を上げるとき、空間と時間の形式的直観に関して統覚的統一が寄与しているのは、形式的直観に統一性を与える形式／形相までであり、それと対になる質料としての空間と時間は統覚的統一の圏外に取り残されている、と診断される。なぜなら、カントにとって、われわれの感性の形式が空間と時間であることは、われわれ以外の有限な知性的存在の感性形式として別のあり方が考えられる以上、われわれに関する偶然的事実——「ある種の粗暴な事実(brute fact)」——だからである(McDowell 2009a, p. 76)¹⁵。

しかし、マクダウエルのB版演繹解釈の解像度をここまで上げることをしなければ、つまり、大枠では、中野はマクダウエルと一致できる¹⁶。この確認のうえで私が問いたいのは、マクダウエル＝コナント的な解釈の細部を、マクダウエルのようにカントに批判的に埋める場合ではなく、カントに好意的に埋める場合に、中野がカントのうちに見出すような自己触発論が有効な選択肢となるのか、ということである。

さて、自己触発と呼ばれる事態には二種類あるということは、しばしば指摘されることである。ひとつは、内的直観を生起させる事態である。カントは、自己の心的状態、とりわけ知覚(外的直観)についての意識(内的直観)を、外的対象の知覚を生起させる外的触発との類比で捉えている¹⁷。もうひとつは、「自発性としての悟性は、与えられた諸表象の多様を通じて統覚の総合的統一に従って内的感官を規定する」(B150)と言われるような事態である。この場合の「内的感官」をどのように理解するにせよ¹⁸、悟性による規定としての自己触発は「悟性それ自身が(…)感性を内的に規定する」(B153)ことであり、カントにとって、それは内的直観だけでなく外的直観も生み出す「形象的総合」である。そして、この総合の純粋な側面は、空間と時間の形式的直観を生み出す「想像力の超越論的総合」である。

中野は、第二の意味での自己触発のみを「自己触発」と呼んでいるように思われる。これは、彼

13 この一文は中野(2021)、150頁で引用されている。

14 マクダウエルが統覚の統一の圏外に残されたものとする「感性的所与」の理解については、150～151頁での中野の記述にぶれがある。「感性の形式には概念に依拠するかぎりでは捉えられない独自の秩序があると見る」解釈者としてマクダウエルを挙げている点を考慮するなら、中野は感性的所与ということで感性的秩序としての空間と時間を念頭においているように思われる。他方で、「統覚の統一から切り離された感性の形式に従って与えられていた所与」という記述は、中野が感性的所与として空間と時間ではなく感覚的多様を考えていることを示唆している。

15 前注で指摘した「ぶれ」を考慮するなら、この意味での所与性——所与の神話の一種——がカントに残っているというマクダウエルのカント批判を正しく取り出したうえで、中野が彼の自己触発論でマクダウエルに応答しているかどうかには疑問の余地がある。

16 マクダウエルと異なり、コナントはB版演繹の成否の診断については保留し、B版演繹の目標を説明することに専念している(Conant 2016, n. 67)。そのかぎりではコナントは中野と対立することはない。じっさい、中野は一貫して好意的にコナントのB版演繹解釈に言及している(中野 2021、139頁、140頁、142頁)。

17 「われわれは内的に触発されるようにしかわれわれを直観しない」(B153)。

18 私はここで「内的感官」の「内的」に経験の意味と超越論の意味を認める解釈を念頭に置いている。たとえば、そうした解釈は中島(2004)、211～212頁に見られる。

が第一の意味での自己触発について論じていないということではない¹⁹。むしろ、おそらく意図的に「自己触発」あるいは「内的触発」という用語を二番目の種類の事態のための名称としてのみ用いることによって、中野は、カントの知覚論の独自性を浮き彫りにしようとしている。中野によれば、想像力の超越論的総合とは、空間時間的な現象世界の中で能動的に運動しながら知覚主体が、自身の視点から開かれる地平として当の空間時間的秩序そのものを生み出す働きにほかならない。B 版演繹における「主体の行為 (Handlung) としての運動」(B155)、「空間の記述としての運動」(B155Anm.)へのカントの言及は、まさにこの行為論的な知覚観が超越論的哲学において彫琢されていることの証左とされる。

中野のこうした自己触発論がマクダウェル＝コナント的な B 版演繹解釈の細部を埋める試みの一つとして魅力的であるのは確かである。感性における悟性の自発性の働きが知覚主体の行為者性として具体的に解釈されてゆく論述は、極度に抽象的な演繹論という骨格の「受肉化」に成功しているように見える。しかし、感性における悟性の自発性の働き、そして、そのもっとも一般的な側面に焦点を合わせるなら、空間と時間の形式的直観の形成が行為者性の発揮に回収されることは、感性の受動性を消し去ることに繋がりはしないだろうか。この懸念は、「想像力という名のもと」(B164Anm.)感性的直観の形成に寄与する悟性の自発性は行為者性として解釈される以外にないのか、という問いとして言い換えることができる。

この問いに答えようとするとき示唆的なのは、マクダウェルが彼の最初期のカント援用である『心と世界』において、カント的な直観としての「経験」に能動性を認めつつも、あくまでその受動性にこだわっている箇所である。

[経験とは受動的なものであること]はもちろん、世界を経験することに能動性が含まれるのを否定することではない。探索することは能動的な活動であり、したがって観察すること、注視することなどもそうである。(…)しかし、経験において生じることにに対してひとがおこなえる制御には限界がある。どこに身を置くべきか、どの程度の強さに注意力を調整すべきか、といったことであれば決定できる。しかし、そういったことをすべておこなったうえで自分が何を経験することになるかはひとに決められることではない。この最低限の論点私が私のこだわっているところである²⁰。

この箇所からわかるのは、マクダウェルが「直観的な」経験への悟性の自発性の寄与の必要性を論じているとしても、彼にとって、この自発性は知覚主体の行為者性の発揮として理解されるものではないということである。一匹の猫が見えるという外的直観が生起するためには、猫がいる方に目を向けたり、目を凝らしたりする必要があるかもしれない。しかし、彼が焦点を合わせているのは、こうした知覚的文脈のなかで生じる受動的状態としての外的直観そのものである。そしてカント自身もまた、直観を形成する感性的総合に見られる自発性を「想像力」と呼ぶことによって、直観のそうした受動的なあり方を見失わないように努めている²¹。これは、想像力が「魂の

19 中野(2021)、第7章。

20 McDowell (1994/1996), p. 10, n. 8. [邦訳309頁]

21 このことを踏まえるなら、B155の“Bewegung, als Handlung des Subjekt”中の“Handlung”を「行為」として訳すことは論点先取の疑いが強くなる。『純粹理性批判』中のHandlungは、少なくとも第一義的には「行

不可欠だが盲目的な機能」(A78/B103)として導入されていたからこそその措置である。

しかし、カントが直観の形成における行為者性の役割に言及していないかと言えば、そうではない。それは、外的直観の形成よりも、内的直観の形成に関連して言及されている。感性論において第一の意味での自己触発について論じるさい、カントは「自己を意識する能力が心のうちにあるものを探し出す(把握する)のだとすれば、この能力は心を触発しなければならない」(B68)と述べている。自分が何を見たのか思い出そうとしたり、自分が何を考えているのかはつきりさせようとするとき、主体は自分の内的世界を探索する。これはちょうど、周囲に何があるのか明らかにしようとするとき、主体が外的世界を探索するという事態と類比的である。しかし、外的直観の形成への悟性の自発性の寄与が行為者性の發揮と同一視されるべきではないのと同じように、内的直観の形成への悟性の自発性の寄与もまた行為者性の發揮と同一視されるべきではない。

カントがさまざまな文脈で「触発」という言葉を用いていることは、たしかに、こうした同一視を促すかもしれない。しかし、内的世界の探索の行為者性として取り出される自己触発は、第三の意味での自己触発として他の二つの触発から区別されなければならない²²。とりわけ、空間と時間の形式的直観を形成する形象的総合を自己触発と呼びうるとしても、それは第三の意味での自己触発から慎重に区別されなければならない²³。

5. おわりに

経験的事物の直観にせよ、空間と時間の形式的直観(純粹直観)にせよ、それらの形成を説明するさいにカントは、「線を引く」のような行為に言及している。そうした行為は、直観を生み出す感性的総合を対象の「構成」あるいは「描出」として説明するために引き合いに出されている。これにより、直観の内容は命題的ではなく「像的」であることが明確になる。しかし、こうした像的な直観内容をもたらす総合は、文字通りの意味での行為のように時間空間の中で主体がなすことではない。それが「主体の働き(Handlung)としての運動」と言われるとしても、それは産出的想像力の「盲目的な」働きであって、そのイニシアチブは主体ではなく直観の対象の側にある。目を向けたり近づいたりといった行為によって、対象が直観される知覚的文脈が用意されるとしても、そうした行為は知覚的直観そのものを形成するわけではない。カントに積極的な評価を与えつつマクダウェル＝コナント的な B 版演繹解釈の細部を埋めるためには、知覚的文脈の用意と知覚的直観の形成を慎重に区別したうえで、後者への統覚の統一の寄与のあり方を明らかにしなければならないのである。

為(action)ではなく「作用/働き(act)」として理解されるべきであるように思われる。この解釈については、Boyle (2020)を参照せよ。

22 内的世界の探索における行為者性の發揮としての自己触発については、Sellars (2002), §43, §66を参照せよ。

23 自己触発をめぐるカントの晦渋な論述は、カント自身がこの区別を見失いがちであることを示唆しているように思われる。しかし、中野からすれば、第三の意味での自己触発は第二の意味での自己触発の一形態である以上、カントがこれら二つを同一視することがあるのはカントの意図に適っていることになるだろう。

参考文献

- Allais, Lucy (2015). *Manifest Reality: Kant's Idealism & his Realism*, Oxford: Oxford University Press.
- Boyle, Matthew (2020). "Kant on Logic and the Laws of the Understanding", in Sofia Miguens (ed.), *The Logical Alien: Conant and his Critics*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Conant, James (2016). "Why Kant Is Not a Kantian", *Philosophical Topics* 44(1): 75-125.
- Hoepfner, Till (2022). "Kant's Metaphysical and Transcendental Deductions of the Categories: Tasks, Steps, and Claims of Identity", in Giuseppe Motta, Dennis Schulting, and Udo Tiel (eds.), *Kant's Transcendental Deduction and the Theory of Apperception: New Interpretations*, De Gruyter.
- Kant, Immanuel (1781/1787), *Kritik der reinen Vernunft*.
- Longuenesse, Béatrice (2005). "Kant's categories and the capacity to judge", in her *Kant on the Human Standpoint*, Cambridge: Cambridge University Press.
- McDowell, John (1994/1996). *Mind and World*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press. (ジョン・マクダウェル『心と世界』、神崎繁・河田健太郎・荒畑靖宏・村井忠康訳、勁草書房、2012年)
- (2009). *Having the World in View: Essays on Kant, Hegel, and Sellars*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- (2009a). "Hegel's Idealism as Radicalization of Kant", in McDowell (2009).
- (2009b). "Avoiding the Myth of the Given", in McDowell (2009).
- (2009c). "Response to Stephen Houlgate", *The Owl of Minerva* 41(1/2): 27-38.
- Pippin, Robert (1989). *Hegel's Idealism: The Satisfactions of Self-Consciousness*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Sellars, Wilfrid (2002). "... this I or he or it (the thing) which thinks ...", in J. F. Sicha (ed.), *Kant's Transcendental Metaphysics: Sellars' Cassirer Lectures Notes and Other Essays*, Atascadero, Calif.: Ridgeview.
- Wolf, Michael (1995). *Die Vollständigkeit der kantischen Urteilstafel. Mit einem Essay über Freges Begriffsschrift*, Frankfurt a. M.: Klostermann.
- 中島義道 (2004). 『カントの自我論』日本評論社。
- 中野裕考 (2021). 『カントの自己触発論——行為からはじまる知覚』東京大学出版会。
- 村井忠康 (2013). 「超越論的演繹を投げ捨てることの難しさ——マクダウェルの治療的カント解釈をめぐって」『日本カント研究』14、74～87頁。